

【原著論文】

活法研究；楊心流柔術巻物の史料調査

久保山和彦

日本体育大学保健医療学部

Historical research; Derived from the *Mokuroku* of *Yoshin-ryu-jujutsu*

Kazuhiko KUBOYAMA

Abstract: *Jujutsu* is a martial arts developed during Japan's Sengoku period that makes minimal use of weapons. Considering the *jujutsu* (and judo) schools of *yoshin*, *tenjin-shinyo*, and *kodokan-judo*, several theoretical concepts related to *waza* were examined, including the methodology of *jujutsu waza* "*mokuroku*". Next, the *yoshin-ryu-jujutsu makimono* ("the scroll") at Nippon Sport Science University Minwa library was analyzed. We were able to get the five *makimono* of *yoshin-ryu-jujutsu*. This study aimed to derive *waza* ("techniques of mental and physical") from the *waza* of *yoshin-ryu-jujutsu*. This research proposes methodology of "a study of *waza*" for deriving from *jujutsu mokuroku* suggests directions for further historical research on *bujutsu*, *jujutsu*, and *kappo*.

(Received: May 9, 2014 Accepted: August 27, 2014)

Key words: historical research, Minwa library, *waza*, *bujutsu*, *jujutsu*, *kappo*

キーワード：史料研究、民和文庫、技、武術、柔術^{註1}、活法

はじめに

本研究は「柔術活法研究」¹⁾の一環として行っているものである。活法は柔道の「絞め技」により「落した患者」を蘇生²⁾させる方法として用いられてきたため、効果の根拠を明確にする医学的研究³⁾が行われてきた。こうした研究が「柔道絞め技の施術法」として展開されたのは、明治期の天神真楊流柔術^{註1}の得意技⁴⁾「當から、締め(殺法)、そして相手は「氣絶」、その場で「活法」を施術する。」という一連の技を理解しようとしてしまった。しかし、柔術にとって実用的な「技」であった柔術活法だが、医学的研究の成果とともに次第に医術として分岐していく。

活法研究の手塚政孝は、「嘉納は、青年期に最初に天神真楊流柔術を学び、次いで起倒流柔術を学んで、他流派も研究しながら講道館柔道を起こして居り、技術面、精神面において多大な影響を受けている。すなわち、精神面においては楊柳の姿すなわち柔の理に徹すべきこと、技術面においては、固技、当身技、活法などに、特に天神真楊流から多くの影響を受けていると考えられる。(後略)文献1, p345より引用」と述べ

た。筆者も楊心流柔術^{註2}、天神真楊流柔術、講道館柔道は、技術だけでなく精神においても同系譜上⁵⁾にあると理解している。また、明治期において、蘇生の活法に合わせ、現代の柔道整復術⁶⁾を用いた「ほねつぎ」が、柔術家により道場⁷⁾で営まれていたが、患者との関係⁸⁾(接し方)には、「柔術」の技術と精神双方¹³⁾を用いたものと考えている。つまり、この時点での活法は医術となる準備段階の柔術技であった。そこで、筆者は、柔術として活法を用いていた江戸期の柔術伝書から「武と医の関わりのある柔術の技^{註9)}」の理解を深めようと、史料調査を行った。

本研究は、これまでの「柔術活法研究」の成果を念頭に置きつつ、現在行っている日本体育大学図書館世田谷本館・民和文庫(以下:民和文庫^{註3)})における史料調査の結果を分析検討し、今後の「柔術活法研究」に役立てていくものである。

史料調査

本調査では江戸中・後期、明治期に伝えられたとみられる柔術巻物を約20巻蒐集する事が出来た。その中には、楊心流柔術、天神真楊流柔術、起倒流柔術⁹⁾等

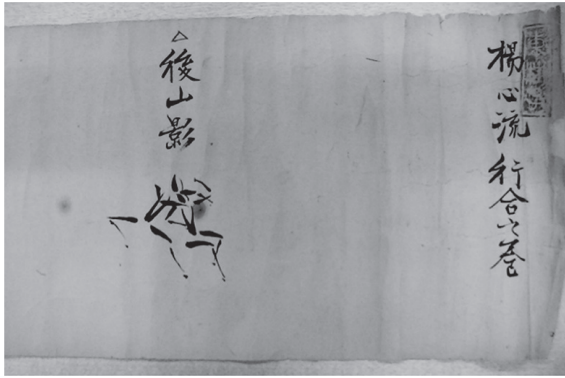


写真1 [楊心巻物；1740] 楊心流行合之巻，後山影，元文5年（1740）。日本体育大学民和文庫所蔵，著者撮影

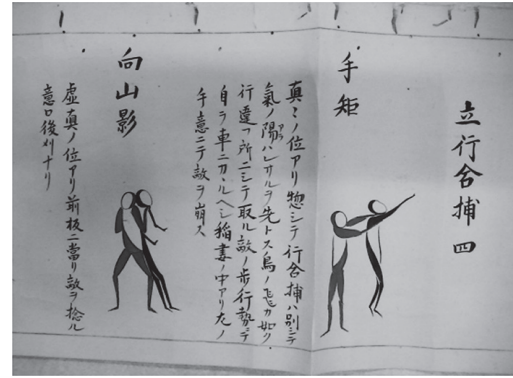


写真2 [楊心巻物；1767] 立行合捕四，手矩－向山影，明和4年（1767）。日本体育大学民和文庫所蔵，著者撮影

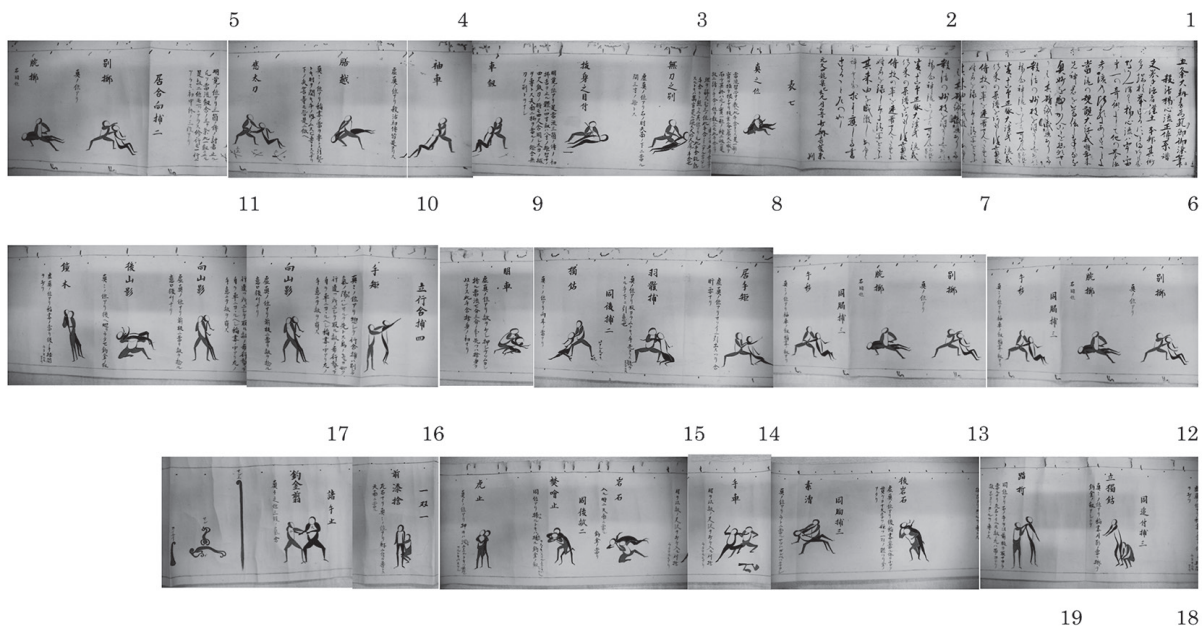


写真3 [楊心巻物；1767] No. 1-19 写真。目録：巻物，白井利左衛門から田村多門へ伝授，明和4年（1767）。巻物を右から左へ開き撮影し，編集した写真。日本体育大学民和文庫所蔵，著者撮影

の巻物があった。本研究で特に注目したのは、楊心流柔術巻物の、元文5年（1740）四巻^{史料1-4、添付写真}、明和4年（1767）一卷^{史料5}で、五巻全て技の目録¹⁰⁾（以下：[楊心巻物；1740]，[楊心巻物；1767]）に注目した。特に貴重な[楊心巻物；1767]は、全容写真を撮影し掲載した。したがって、ここではこの目録の分析を軸に研究を進めていく [楊心巻物；1740] [写真1]，[楊心巻物；1767] [写真2]，全容写真 [写真3]。

〔楊心巻物；1767〕の全容写真及び分析

この巻物は、[柔術大意→技→系図]で構成されていたとみられ「技・目録」と考えられる。目録の冒頭に

は柔術の大意と思われる文が書かれ、それに続き図と解説付きの技名が書かれ、末尾には「教え」とみられる文、系図、年号、授与者名、花王、印、受領者名が書かれていた。[写真3 No. 1-19]は、[楊心巻物；1767]の全容写真である。

〔楊心巻物；1767〕冒頭部の分析

〔楊心巻物；1767〕の大意とみられる冒頭には、「五条大納言為範の染筆」とあり、続いて殺活楊心流の正当な系譜にある目録である旨が書かれている。その理由として大江仙兵衛義時^{註4}由来の目録である旨、大津氏より伝えられた殺活の妙技、奥義を系図付きで伝え

ている。また、元文四年九月二五日少納言菱原が証明したことも書かれていた。

これは「大意」をあらわしたもので無く、神文や起誓文¹¹⁾とも違っている。筆者はこの部分は、公家(大納言, 少納言)が目録の正統性を証明したものと考え、「お墨付き」を与えている証明文であると考えた[写真4]。

〔楊心巻物；1767〕の目録と技

〔楊心巻物;1767〕の目録を目録名、技名、全容を示した写真番号を表に整理した。目録には技名と合わせ、技の様子が描かれた図、「攻撃する側（トリ）は黒描

き」と「攻撃を受ける側（ウケ）朱描き」と技の意義^{註5}とみられる解説文が書かれていた〔表1〕。

また、技名「釣 鏢」に続いて、記号的図と文が書かれていた。この図は、4つ朱色で描かれており、長い杖様のもの、人体に似た大小のもの、短い杖様のもの、それぞれに黒いカタカナ文字で、[長い杖様のもの;サン上、人体図に似た大小のもの;小上/セン、大下/ゴ、短い杖様のもの;カイテイ]と書かれていた。

さらに、記号的図に続いて〔右表セツ下モ数十ノ手合アリ然ニ時トシテ変異スルコトアリ表七ノ業ニライテハ楊心枢機ノ手合ニシテ萬代不異ノ経業ナリ示ニ疎カニスルコトナカレ〕という文が書かれていた。これ

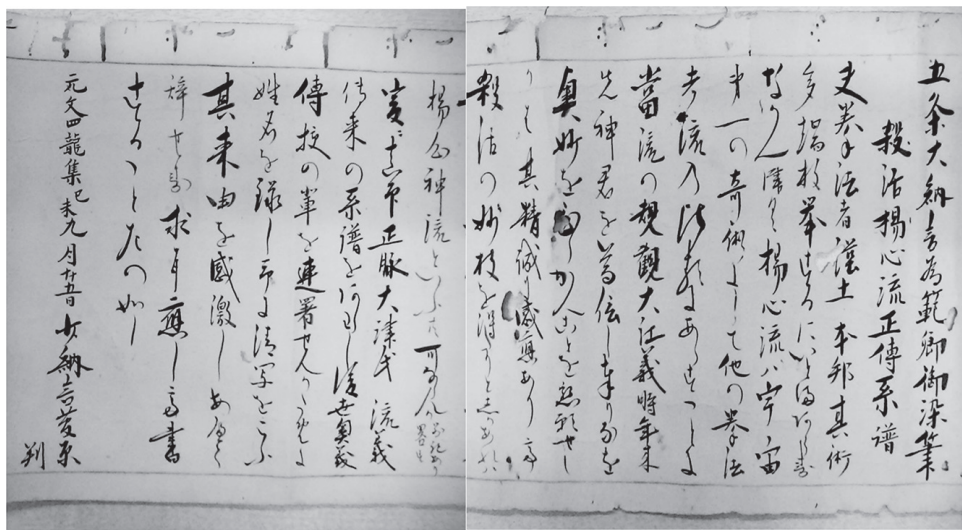


写真4 〔楊心巻物；1767〕目録冒頭文。目録：明和4年（1767）、[写真3 No. 1, 2]を拡大したもの。日本体育大学民和文庫所蔵

表1 〔楊心巻物；1767〕目録名、技名と全容写真番号分類

目録名	技名	数	写真番号
表 七	真之位 無刀之別 抜身之目付 車劔 袖車 膳越 應太刀	7	1,2,3,4
居合向捕 二	別擲 腕擲	2	4,5,6
同脇捕 三	手移 居手矩羽骸	3	5,6,7
同後捕 二	独鉤 朋車	2	7,8
立行合捕 四	手矩 向山影 後山影 鐘木	4	9,10
同追付捕 三	立独鉤 踏折 後岩石	3	11,12,13
同胸捕 三	素漕 手車 岩石	3	13,14,15
同後敵 二	樊憎止（樊籠） 虎止	2	15
一双一	前添捨	1	16
諸手止	釣 鏢	1	16

合計 28 技
日本体育大学民和文庫 明和4年（1767）巻物を参照

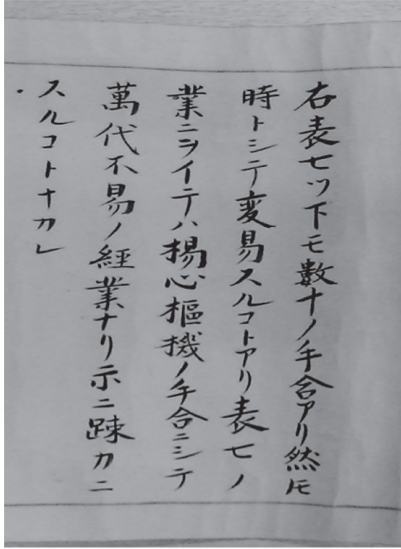


写真5 [楊心巻物；1767] 写真。記号図に続く文。目録：明和4年（1767），[写真3 No. 18] を拡大したもの。日本体育大学民和文庫所蔵

は、楊心流極意と修行者の「心得を教えた文」と考えられる [写真5]。

〔楊心巻物；1767〕の系図

巻末には系図が書かれていた [写真3, 19]。また、年号、花王、印、が確認できた。書かれた名は、右から秋山氏、大江氏、三浦氏には、伝承の様子を表したと思われる朱線が名の上に引かれ繋がっており、その朱線は、佐藤氏、前田氏、河野氏、高橋氏には掛からず、大津氏に掛かり繋がる。そして臼井利左衛門へ至っていた。目録を受領した人物は、「田村多門」であった。この系図から「技・目録の系譜^{註6}」を分析すると、[明和四年（1767）に、流祖秋山氏、大江氏、三浦氏を通じて、五番目の弟子である大津氏へ伝わり、その弟子の臼井利左衛門によって与えられ、田村多門が受領した技の目録]と見られる。

まとめ

本史料調査では、「活法が柔術として行われていた時代の技」の史料として、楊心流柔術の巻物5巻^{史料1-5}を蒐集することができた。また、「明和4年（1767）臼井利左衛門、田村多門受」（[楊心1767. 巻物]）については、全容写真の掲載に合わせ内容分析を行った。分析は「冒頭、技、系図」の順で行うことができ、以下にその順でまとめる。

まず、冒頭には、「五条大納言為範染筆」と書かれており公家の名で始まる。内容は、起誓文や神文ではなく証明文であった。この文には「技に関する教え」は書かれてはおらず。巻物の価値や、目録の系統を保証

した文であった。ここで、公家と楊心流柔術が何らかの関連^{註7}があったことを示唆する知見を得た。

次に、目録名と技名の分類を行うことができた。目録名は10項目、技名は28技であり、それぞれに、技の図（トンボ絵¹⁴）が「（トリ）は黒、（ウケ）は朱」で描かれ、その技の意義説明の文が書かれていた。また、本調査で蒐集した別史料 [楊心巻物；1740]^{史料1-4, 添付写真}では、四巻の冒頭にそれぞれ目録名が書かれ、技は各7技、四巻合計28技が図とともに書かれていた。今後、別の史料や文献と比較し、「技や目録」の変化から、その時期の社会事情を検討する課題を得た。さらに、朱色で書かれた4つの記号図を確認し、「教え」とみられる文を分析した。「記号図」と「教え」は、「楊心流柔術大意」を現したものと見なされ、「技は変容するものだが、表七の技は楊心の原理をなす。」という意味の文が書かれていた。

末尾では、系図^{註8, 添付資料表1}の分析を行った。その事で、目録が人から人に伝えられていく様子を知り、「技」を背景とした人と人の関係性、さらに次の「伝承系」へ裾野を広げ繋がる「技」のダイナミズムを史料から推察することができた。

おわりに

今回、楊心流柔術目録の分析から、直接的な「活法技」を見いだす事はできなかった。しかし、目録には「[表七]は、枢機な技」とあり、その「表七」に「真之位、無刀之別、拔身之目付、車劔、袖車、膳越、應太刀」が技名として書かれているが、これは「攻撃的な技」ではない。

また、楊心流は江戸期において最も広く用いられた柔術で、山本民左衛門英早の真之神道流柔術、磯又右衛門の天神真楊流柔術を通じて嘉納治五郎の講道館柔道へ、また、大塚博紀の和道流空手道¹¹、摩文仁賢和の糸東流空手道¹²等、現代武道の多岐にわたる「流れ」に影響を及ぼしたとされ、この「流れ」は、すべて「活法」を技に取り入れている。

本調査で得た「表七」は、「武と医の関連」を示すこれまでの知見^{註9}と、楊心流柔術の「流れ」を含めた周辺事情から、「柔術活法」に何らかの影響を与えている技であると考えられ、さらに研究を継続していくものである。

謝辞 平成26年4月日本体育大学に着任し、「民和文庫」の所在を聞き求めた際、日体大の中島図書館課員（元）の丁寧な導きがあつて辿り着く事ができました。また、事前準備から本調査まで、多くの図書館職員の方々に多大なるご協力をいただき、研究にとって重要な楊心流目録を多数蒐集させていただけました事御礼

申し上げます。

また、調査と平行して開催された「民和文庫勉強会」にて、福島大学中村民雄先生にご指導いただきました事深く感謝申し上げます。

参考文献

- 1) [手塚政孝 楊心流, 長尾流体術, 天神真楊流柔術「活法」について 明治大学人文科学部研究紀要 vol. 50, 343-360 2002], 拙稿 [「活法の系譜」柔術当て身技の変容 (第45回日本武道学会 抄録 p55), 武術由来の身体技法にみる医療文化—柔術活法研究から— (第46回日本武道学会 抄録 p95)], [井ノ口松之助 死活自在接骨療法柔術生理書 明治29年 (1896) 八幡書店レプリカ 2012] を参考として行われていた研究。
現時点では「当て身技の急所」は、中国医学の治療経穴であった事、怪我の施術法 (脱臼の整復法や包帯法) が同時に書かれていた事等から、柔術は医学知識を技に受容し、「医療目的においても行われていた」と云う側面を知った。また、西洋医学の解剖学、生理学等の基礎医学知識や、呼吸法を考慮した姿勢、体操法や稽古着等の記述を目にし、当時国家的に導入され萌芽期にあった「体操理論」が柔術者の書物に持ち込まれていた事を示唆する資料を得ている。
 - 2) 蘇生について: 柔道の絞め技による落ちは、気管を絞める技では無く、一時的に頸動脈圧迫による迷走神経反射による失神状態である。しかし、柔術の技では当て身技で落ちたケース、また溺死者の蘇生にも使用されていた等「意識喪失状態」の患者に広く用いられていた (明治期)。そのため蘇生とした。拙稿 [Correlative study of Sappo and Kappo. From Waza (technique) of TenjinShinyo-Ryu-, The 8th International Judo Research Symposium 2013 Poster Presentation] では、当て身と活の関係を分類発表している。
 - 3) 活法 (呼吸活8技) は、1932年に発足した「講道館柔道医事研究会」以来、今日まで研究されており、それらは柔道の「絞め技」の結果、「落ち」に至った者に対する医療的対処法としてであった。近年では、手塚政孝、浅見高明、佐々木武人、松本芳三等の研究者らが「柔道絞め技による落ちから回復させる手法」として、また「なぜ落ちるのか」の活、殺の双方から研究されている。[手塚政孝 柔術絞め技によるいわゆる「落ち」の実験生理学的研究 株式会社文化書房博文社 東京都 1978 は実験研究], [浅見高明 武道における活法の効用 人体科学 9, 1 pp43-56 2000], [浅見高明, 松本芳三, 佐々木武人 柔道における活法と人工呼吸の比較研究 武道学研究 5, 1 p25 1972] 等がある。
 - 4) 天神真楊流柔術の得意技に関する文献は多い。ここでは、明治期の天神真楊流柔術道場におけるエピソードを紹介する。「警視庁柔術世話掛 関口 (渋谷流) 柔術家久富鉄太郎の言説「昔、磯道場に稽古に出かけた際に、市川八郎という五世磯又右衛門門人と稽古をした際、座礼をして立ち上がったら、いきなり拳に当て身され、うずくまっていたところを三角締めで極められ、落とされた。」 (天神真楊流の得意技を示す話), [社団法人設立30周年記念 接骨
- 医学史 社団法人日本柔道整復師会 会長 鳥居良夫 p72 1983] にあったエピソードから「得意技」と表現した。
- 5) 技の系譜を見ると楊心流柔術, 天神真楊流柔術, 講道館柔道は、同系譜にあるが異名流派として現代に続いている等、流祖の個性が技や名称の変容が複雑で「武士道の系譜」としてそのまま理解する事は出来ない。「柔術の精神」を解明する際には、「民間的精神性」を明らかにしておく必要性を感じている。[永木耕介 柔術・楊心流の特性について (その2) 武道学研究 16-1, 12-14 1984] [鈴木大拙 日本的靈性 (完全版) 角川学芸出版 2010] [藤原稜三 守破離の思想 ベースボールマガジン社 p78 「武道と守破離」] 等を参考として、民間信仰の諸相を考慮するが必要であると考えている。
 - 6) 柔道整復師の業務範囲は、骨折、脱臼、捻挫、打撲等の施術 (評価、整復、固定、後療法) である。[社団法人全国柔道整復学校協会教科書委員会編 柔道整復学理論編 南光堂 東京都 2-13, 2011], 拙稿 [治療行為と説明 - 柔道整復師が関わる治療実践の民族史的研究 放送大学大学院修士論文 2004] を参考とした。
 - 7) 筆者が別の研究で行っている調査では、明治28年、東京市で天神真楊流柔術道場と「ほねつぎ」を行っていたものが17名いた。(添付資料表2) また、現在調査中の [明治26年発行 日本武術名鑑] には、今泉八郎 (真影流柔術) を合わせ6名の柔術家が掲名されていた。
 - 8) 現代における患者—施術者 (柔道整復師) の関係性は、医師が患者と関わる際の様子と違う。明治の柔術家は道場という環境でどのような施術を行っていたのは、明治期の天神真楊流柔術家で「ほねつぎ」であった井上敬太郎を軸に調査している。
 - 9) 嘉納治五郎は明治15年講道館柔道を設立後、明治16年10月に起倒流柔術の免許を飯久保恒年から受けている。[工藤雷介 柔道名鑑 柔道名鑑刊行会 pp672-673 1990 を参考にした]
 - 10) 竹内流2代目竹内常陸助久勝にあてた「起誓神文之事」[日本柔術の源流 竹内流 p205], 神之神道流「起誓文」等、巻物や「切紙」に書かれている門外不出の誓い。本調査では、「巻物をあけてみる事で、技の目録が書かれている事が判った」目録に技名と合わせて「トンボ絵」といわれる技の様子を現した図、技の解説とみられる記載がなされていた。[平上信行 秘伝古流柔術技法 愛隆堂 東京 1992], [長谷川哲郎 大分県を中心に調査した柔術「楊心流」について 大分県地方史 (51), 1-21, 1968], [老松信一 日本武道体系 vol. 6. p427]
 - 11) 大塚博紀の和道流空手道については、[江里口栄一 藤原稜三 室木洋一著 日本武道体系 vol. 8. p19]
 - 12) 摩文仁賢和の糸東流空手道については、[全日本空手連盟糸東会君子の拳 糸東会本部道場 2013]
 - 13) 「柔術」の技術と精神双方、5) 「武士道の系譜」, 「柔術の精神」等は、技に通底した精神性をさす言葉として使用しているが、これを「柔の理」の「理」を様々な角度から検討している。本稿では「身体の理解」と云う言葉で、「おわりに」内に掲げたが、身体の原理を技から知ろうとする「解剖生理学知識」,

- 「運動学的体験」もその一部になる。[富木謙治 離隔態勢の技の体系的研究 建国大学研究院 (康徳5年) 1938], [トレバー・レゲット著, 板倉正明訳 伝統と新しい時代の精神 日本武道のこころ マイサル出版会 1993], [新渡戸稲造 奈良本辰也訳 武士道 株式会社 三笠出版 2002 22 刷], [奈良本辰也訳 武士道の系譜 中央公論社 1980 6 刷], [相良亨 武士の思想 株式会社 ペリカン社 1984], 拙稿 [Experimental study of “Shin-poh”, IDO Movement For Culture Judoka’s way of feeling Journal of Martial Arts Anthropology vol. 13 no. 2 pp83-93 (2013); (柔道家の「心法」を自律神経の変化を測定した実験研究)] 等を参考に研究している。
- 14) トンボ絵については、本研究史料 [楊心流居捕之巻 元文5年 (1740) 河野巢安入道, 高橋半蔵受, 楊心流行合之巻 元文5年 (1740) 河野巢安入道, 高橋半蔵受, 楊心流壁添之巻 元文5年 (1740) 河野巢安入道, 高橋半蔵受, 楊心流立合之巻 元文5年 (1740) 河野巢安入道, 高橋半蔵受 民和文庫], [楊心流目録 明和4年 (1767) 臼井利左衛門, 田村多門受 民和文庫], 及び1) においも述べた [平上信行 秘伝古流柔術技法 愛隆堂 東京 1992, p48, 73, 74 の「トンボ絵」], [長谷川哲郎 大分県を中心に調査した柔術 “楊心流” について 大分県地方史 (51), 1-21, 1968, 紙面の背景にある絵] を参考として「昆虫様の人体図」を「トンボ絵」とした。
 - 15) 竹内流編纂委員会編 日本柔術の源流 竹内流 日貿出版 1979
 - 16) 老松信一他 日本武道大系 第6巻 同朋社出版 1982
 - 17) 江理口栄一 藤原稜三 室木洋一他 日本武道大系 第8巻 1982
 - 18) 鈴木大拙 日本の靈性 (完全版) 角川学芸出版 2010
 - 19) 奈良本辰也 武士道の系譜 中公文庫 1980
 - 20) 小佐野淳 図説 武術事典 初版 長崎と柔術 株式会社新紀元社 東京都 2003
 - 21) 井ノ口松之助 死活自在接骨療法柔術生理書 明治29年 (1896) 八幡書店 レブリカ 2012
 - 22) 柔道教範研究会 文部省要目準拠 新制柔道教範 盛林堂 東京都 昭和13年 (pp141-154 七護身法, 八救急法の章)
 - 23) 入江康平 近代武道文献目録 第一書房 1989
 - 24) 藤原稜三 守破離の思想 ベースボールマガジン社 (p78 武道と守破離)
 - 25) 渡辺一郎編 史料明治武道史 新人物往来社 東京都 1972
 - 26) 児玉正幸 武門の倫理 行路社 京都府 1993
 - 27) 直木公彦 白隠禅師一健康法と逸話 株式会社 日本教文社 1992
 - 28) 西村公朝 密教入門 株式会社新潮社 1996
 - 29) 五米重 新版 山の宗教一修験道 株式会社 淡交社 1999

註

- 註1 柔術は、捕手、腰の廻、羽手、組打、体術、胎術、拳法 (やわら、けんぼう)、和 (やわら)、小具足、取捨術等と呼ばれ流派の系譜や成立時期、技術内容等により伝書・巻物の記述名称が違う。さらに、活

法、易法、兵法、経絡・経穴 (楊心流胴積門) 人体解剖図、医学知識等も含むとされる。小太刀を持つか、或は、素手で行う武術とみられ、前述した技法や知識を、包括的にとらえ「柔術」としている事ができるため総合武術とも云える。[老松信一他 日本武道大系 第6巻 同朋社出版 1982] [竹内流編纂委員会編 日本柔術の源流 竹内流 日貿出版 1979] を参考とした。

- 註2 流祖磯又右衛門、天神真楊流では「殺と活」を「柔術技」として用いていた。また、流祖の磯又右衛門は小兵で素早い動きから「当て身 (殺)」を行う戦術を持っていた。また、稽古に「乱取り」を取り入れていた。[明治20年柔剣棒図解秘訣 (井ノ口松之助著), 明治26年天神真楊流柔術極意教授図解 (吉田千春, 五世磯又右衛門共著, 井ノ口松之助編著), 井ノ口松之助著, 死活自在接骨療法柔術生理書, 明治29年 (1896)] を参考とした。

- 註3 流祖秋山四郎兵が武技として持ち帰ったとされる活法28技、殺法は3技であり、武術としての評価は得られないと判断し、太宰府天神に隠って修行し、捕手300手を工夫して楊心流を興した。その後、中興の祖といわれる大江仙兵衛義時 (1650 ~ 1700。医師という説あり。) により、全国に普及して隆盛を極めていく。[長谷川哲郎 楊心流の易法について: 楊心流研究 (其の二) 大分県地方史 (56), 94-103, 1970], [長谷川哲郎 楊心流の武術理論 (武技と兵法) の内武技の章 (附武器について): 楊心流研究 (其の三) 大分県地方史 (56), 104-119, 1970], [長谷川哲郎 楊心流家系と「当て身、生かし」の理論および医術について: 楊心流研究 (其の四) 大分県地方史 (57), pp20-36, 1973], [老松信一他 日本武道大系 第6巻 同朋社出版 pp395-411 1982], [永木耕介 武道における思想解明への一試論 武道学研 18-(1), p5, 1985], 拙稿 [活法の系譜 柔術当て身技の変容 武道学研究 vol. 45. 別冊 p55, 2012]

- 註4 日本体育大学図書館 世田谷本館 2F, 3F に所蔵されている貴重図書で、福島大学 人間発達文化学類 教授中村民雄氏寄贈図書 (目録存在, 中村民氏のもと定期的勉強会で整理中) 尚、本調査 (4/25) に臨むにあたり、事前に4回の調査を行った、資料蒐集にあたり、資料提供者との意思疎通をはかるとともに [伝書名, 伝書年号, 流派, 目録, 大意, 歌] 等の内容を「短冊」に記入し透明ビニール袋に約20本収納整理した。

- 註5 大江仙兵衛 楊心流柔術中興の祖と云われ、「胴積之図」 ([小佐野淳 図鑑 武術事典 株式会社 新紀元社 2003 p139 長崎と柔術] に写真が掲載されている) という中医学の、素問、靈樞、難経、傷寒論等の医学理論を肥前諫早 (出生地) にて入手し、楊心流柔術に採用された。武・医の関わりを知る手がかりとなっている。大江仙兵衛 楊心流柔術中興の祖に関しては [老松信一他 日本武道大系 第6巻 同朋社出版 pp395-411 1982] 参考にした。

- 註6 目録の「真之位」は、姿勢や間合い表現した姿勢の原理について書かれてあった。(ポーランド学会口頭発表準備中の拙稿 [「身体に触れない技」の意味についての一考察: 楊心流柔術の巻物調査から] に

添付資料 表1 [楊心巻物；1767] 系図と文献に掲載されていた巻物系図の比較表
表内上[楊心巻物；1767]の系図，表内下日本武道大系の目録にあった系図

[楊心巻物；1767]系図写真から	秋山 大江 三浦 佐藤 前田 河野 高橋 大津→臼井→田村
	↑ 1 2 世代
	↓ 大津? 1 2 3 世代
日本武道大系の目録から	秋山 大江 三浦 佐藤 前田 高橋 木津→土肥→大江→片桐

老松信一他 日本武道大系 第6巻 同朋社出版 1982 p401 を参考として作成

より、「柔の理」について検討中。）

註7 お墨付き」与えた公家が江戸時代にどのような役割を果たしていたのかについては、拙稿では扱わないが、生活の場を京から地方に移し、百人一首を絵カルタとして、書や絵付けを行う者もあったと云われ「江戸時代の公家の生計」を調査する必要性を感じている。

註8 筆者は、「系図は人の繋がりを指し、系譜は流派を超えた技の繋がりをさす」と考えている。14) [老松信一他 日本武道大系 第6巻 同朋社出版 5-90 1982]にあった楊心流柔術の系図と[楊心流巻物；1767]の系図を比較して、目録の受領時期、試論した際の表（添付資料 表1）。

註9 [手塚政孝 楊心流、長尾流体術、天神真楊流柔術「活法」について 明治大学人文学研究紀要 第50冊 2002 p349]の文中において「楊心流死活之極秘」（文化7年（1811））の史料にふれ、当て身や、絞め技により相手を制した際の相手の状態を様々な視点から細かく観察して対処する為の極意を引用して、「効いた際の様子、相手の呼吸仕方、脱力感等の観察法」と論考している。これらは、筆者が、「表七」は、医者との医療面接と似ていると思い「楊心流柔術の技と医の関係」を考える端緒となっている。

史料

- 1 楊心流居捕之巻 元文5年（1740）河野巢安入道、高橋半蔵受 民和文庫；[楊心巻物；1740]（添付写真）
- 2 楊心流行合之巻 元文5年（1740）河野巢安入道、高橋半蔵受 民和文庫；[楊心巻物；1740]（添付写真）
- 3 楊心流壁添之巻 元文5年（1740）河野巢安入道、高橋半蔵受 民和文庫；[楊心巻物；1740]（添付写真）
- 4 楊心流立合之巻 元文5年（1740）河野巢安入道、高橋半蔵受 民和文庫；[楊心巻物；1740]（添付写真）
- 5 楊心流目録 明和4年（1767）臼井利左衛門、田村多門受 民和文庫文書；[楊心巻物；1767]

調査場所

日本体育大学図書館 世田谷本館2F, 3F, 貴重書室 民和文庫

〈連絡先〉

著者名：久保山和彦

住 所：神奈川県横浜市青葉区鴨志田町 1221-1

所 属：日本体育大学保健医療学部整復医療学科

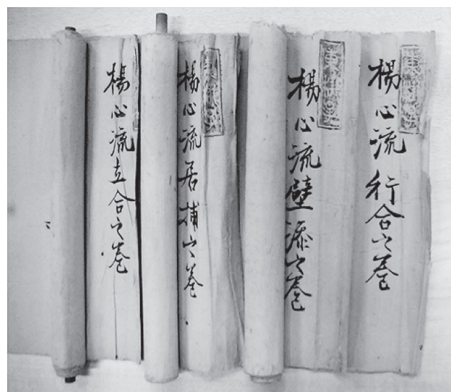
E-mail アドレス：kuboyama@nittai.ac.jp

添付資料 表2 明治中期における天神真楊流柔術町道場主（東京市）

天神真楊流柔術者は町道場経営とともに「ほねつぎ」を開業していた。

記載順	氏名	所在地
1	五代目 磯又右衛門正幸	松枝町
2	戸沢正徳	向柳原
3	吉田千春	錦町
4	田子信重	大根河岸
5	長谷部新治郎	八丁堀
6	八谷護	開運橋
7	竹岡宇三郎	蛸殻町
8	吉田順	小舟町
9	奥田金弥	愛宕町
10	高木三之助	愛宕下
11	今泉八郎	三筋町
12	井上敬太郎	天神下
13	市川洵	春木町
14	辻斧助	橋町
15	書上芳太郎	溜池
16	山口勝太郎	荒木町
17	筆者長兄	

社団法人日本柔道整復師会会長島居良夫、社団法人設立30周年記念、接骨医学史（昭和58年）1983 p72、長谷川五郎氏の記述を参照著者作成



添付写真 楊心流柔術巻物4巻、元文5年（1740）。日本体育大学民和文庫所蔵